
【JEC-ET】 020103

One More Paragraph!

- J E C の脈絡における福音主義神学的思索のひとつ -

作成日：2002年4月20日(土)

こんにちは、関西聖書学院「福音主義神学」教師、一宮基督教研究所の安黒務です。J E C の源流と歴史的遺産をさぐるために、今週は宇田進先生の「福音主義キリスト教と福音派」の「第二章 福音派の源流と歴史的遺産：第一項目 重要な三つの要素」のテキストから三回目の学びをいたしましょう。

【テキスト】

さきに、「エバンジェリカル」という名称は、「喜ばしい知らせ」、あるいは「福音」を意味する新約ギリシャ語の「ユアングリオン」にさかのぼることから、福音派とはごく一般的には「福音に献身している者」を意味しているという定義にふれた。

【解説】

今回は私たち福音派（カリスマ派を含む）の真の定義 - 「福音派とは、1846年に結成をみた福音主義同盟の九項からなる信仰基準と、一九七四年の世界伝道会議でだされた『ローザンヌ誓約』の中に表明されている聖書的信仰と宣教観を信奉する、聖霊派から改革派までのキリスト教共同体、あるいは連合体を指す。」を紹介させていただきました。そしてその前半部分の説明をさせていただきました。今回は後半部分「ローザンヌ誓約」の歴史的・神学的背景の説明をさせていただきます。

・ 歴史的背景

まずローザンヌ会議の歴史的背景に目を留めると、初代教会以降、地中海世界で広まったキリスト教は、ローマ帝国において東西に分かれ、ギリシャ正教とローマ・カトリックに分かれました。そしてさらに歴史は流れ、宗教改革においてヨーロッパ世界はカトリックとプロテスタントに分かれました。そしてさらにプロテスタントは種々の教派に分かれていきました。そのような中において教派間の敵意、偏見、誤解、闘争が継続していきました。

教派間の闘争がいかに神の御旨に反するものであるかを痛感したのは、十九世紀において最高潮に達した海外宣教運動に参加した宣教師たちでありました。十九世紀の世界宣教の進展の中で欧米諸国の海外宣教団体が協力して海外伝道をはかろうと世界宣教会議が開かれました。ロンドン（1880年）で始まり、ニューヨーク（1900年）エジンバラ（1910年）と続けました。

・ 分岐点 - エジンバラ会議

しかし、1910年に開かれたエジンバラ会議を分岐点として、エキュメニカ

ル派と福音派の対極化が生じてしまいました。それはエキュメニカル派が次の四つの点で宣教運動を非聖書的な方向に向けてしまったからでした。福音のメッセージの権威を喪失させたこと、主たる関心とエネルギーをこの世の社会的・文化的・政治的問題に集中させていったこと、組織と機構の上での一致・合同に関わりすぎたこと、伝道の現場からの人々よりも、いわゆる教会指導者たちが主勢を占めていたため、宣教の問題よりも教会政治的色彩の強い会議に傾斜したことであります。

・ローザンヌ会議ⁱⁱ

そのような状況に対する反省に立って持たれたローザンヌ会議は、聖書信仰に立って伝道している現場の伝道者・宣教師たちを中心に、文字通り世界大の伝道と四つに組んだ福音派の会議でありました。

a . リベラル派：情況性 = 決定因

今世紀における政治的・経済的領域の西欧世界の後退と第三世界の台頭は宣教事情にも革命的な変化を呼び起こしてきました。西欧化の歴史観をもつ十九世紀的伝道論、つまり福音宣教のみではなく文化破壊の側面をもつキリスト教世界的発想を基調とした伝道論は、民族運動の中で崩壊の危機にさらされました。そのような背景の中で西欧教会の伝道論は再編成を余儀なくされていきました。ある議論の中には、主イエスの大宣教命令は「消滅し、無意味なものとなった」と混同する向きもありました。リベラルな西欧教会の内部には、すでに世界伝道へのビジョンの喪失、海外宣教師志願者の減少、海外宣教予算の削減という事態がでてきています。

このように、リベラル派の宣教論を見ると「情況性」というものが認識と行動を決する決定因となっていることがわかります。

b . 福音派：情況の理解

これに対してローザンヌ会議においては、従来の宣教のあり方や宣教師の位置・役割についてのリアリスティックな再評価の必要を認識しつつ、前述の混同を避け、伝道に関する主の「大命令」を今日でも生きている命令として受け取り、あわせて西欧教会と第三世界教会との正しい形でのパートナーシップの確立を目指すこととした。また宗教の多元化社会の中で、諸宗教の良い面、異なる文化の美しい点を認めつつ、「キリストのみ」をなくせずしにするシンクレティズムやユニバーサリズムを拒否し、キリストの独自性と普遍性を歴史的教会の信仰告白の線に従ってはっきりと打ち出すこと、そして伝道と社会的責任とのバランス、人間の自由のための闘争の評価等について誓約されています。

福音派はローザンヌ会議において 神の御旨、聖書の権威と力、キリストの独自性と世界性、伝道の本質、キリスト者の社会的責任、教会と伝道、伝道における協力、諸教会の伝道協力、伝道的責務の緊急性、伝道と文化、教育とリーダーシップ、霊的闘争、自由と迫害、聖霊の力、キリストの再臨の項目について誓約しましたⁱⁱⁱ。

阪神大震災のときには諸教会、諸神学校、クリスチャン諸兄弟のさまざまなかたちでの救援活動がなされました。それらの活動は、ローザンヌ誓約の第五

項「キリスト者の社会的責任」の中で扱われ、位置づけられている事柄に属します。

c . 福音派：聖書 = 決定因

ローザンヌ誓約においては、今日の情況に生きるものとして、今日の情況と遊離せず、しかし情況に振り回されもせず、ただ「靈感された神のことば」である聖書という決定因に基づいて情況を整理し、今日わたしたちが何をどのようにすべきかということの指針が明確に示されているのです。JEC50周年記念誌にも掲載されましたこの誓約をよく研究することは、21世紀のわたしたちJECの神学教育・教会形成・宣教活動を豊かで実りあるものとすると思います。

-
- i 教文館「キリスト教大事典」
 - ii 宇田進編「ポスト・ローザンヌ」
 - iii ジョン・ストット「ローザンヌ誓約」
- (以上の文献よりの抜粋・編集)